

「既習内容を活用するよさ」が実感できるまとめにしよう。

- 「①本時を構想する上でポイントとなる素地」をもとに、「⑤まとめ」を子どもの言葉で記述する。
- このまとめにつなげるには、どんな学習課題をすればよいかと、まとめから学習課題へ逆にたどり、子どもの意識の流れに沿った授業展開の骨格をつくる。

☆共同追究に山場をおき教材研究を深める。

- ① 数学的な見方・考え方、操作活動の関連、前時までの子どもの経験や既習内容をもとに、本時を構想する上でポイントとなる素地を洗い出す。
- ② 学習問題と既習との類似点・相違点を確認し、子どもが問題解決に対する結果の予想や解決の見通しがもてるようにして、学習課題をすすめる。
- ③ 個人追究では、一人一人の考え方やつまづきを予想し、個に応じた複数の手だてを準備する。
- ④ 共同追究が発表会で終わらないように、互いの考えの共通点や相違点に着目したり、思考を深めたりするための発問を用意する。
- ⑤ 本時のまとめに寄せた定着・活用（評価）問題を用意する。また、習熟の程度に応じた問題を用意したり、家庭学習と結び付けて問題量を確保したりするなど、子どもの実態に合わせて定着・活用の方法を工夫する。
- ⑥ 問題解決の考え方を図や式に表現したり、表現された図や式から考え方を読み取ったりする等、双方向の学習を位置付ける。

- “ひと工夫”して既習の解法へ帰着していくという算数・数学の学び方の習得
- 単元を超えて、繰り返し登場する数学的な見方・考え方や操作活動への着目
- つける力の確実な定着と自己の高まりの自覚

場面は違っても、同じ見方・考え方を使えば解決できる。

例

単元名「 _____ 」(小・中 _____)

《学習問題》

- ①本時を構想する上でポイントとなる素地
- 問題解決のための知識・技能
 - 既習とつなぐ数学的な見方・考え方

②見通し：

→

②学習課題：

③個人追究：

④共同追究前半（解法の比較検討，既習の想起）

「 _____ 」
「 _____ 」

④共同追究後半（思考を深める）

「 _____ 」
→ 「 _____ 」
「 _____ 」

⑤まとめ（子どもの言葉で）

・
・

⑥定着・活用問題